R6 年 8 月 新聞記事（山陰中央新報）

令和 6 年 8 月 4 日（日）付

大学の「研究」子どもにPR

島根県立大松江キャンパス

21日から参加型イベント

プログラミング、絵本作り

9日応募締め切り

島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）で、イベント「こどものだいがく」が21、23、31日と9月21日の4日間、開かれる。子どもたちに「研究」に触れてもらうのが趣旨で、大学の教員らが専門分野を生かし、学びを広げるきっかけを提供する。

対象年齢はプログラムで異なり、親子連れなら3歳から参加できるものや、年齢制限のないものもある。

8月21日は、人を助けるテクニックを学ぶ「救急について学ぼう！」や、プログラミングを学んで取り組むゲーム作り、詩を創作する「言葉で遊ぼう」など。23日は、手や顔や足を石こうにする「体の一部を石こう像にしちゃお！」、ロボットのプログラミングなどに参加できる。9月21日は「自分だけの絵本作り」を開催する。いずれも、参加には事前予約が必要。

予約不要のプログラムもあり、重りを使ったおもちゃ作り（21、31日）▽木材を使ったロボット「ロボホー」づくり（31日）▽里親さんと一緒に遊ぼう（同）▽おはなしのじかん（同）－など。

要予約のプログラムへの申し込みは9日締め切り（2次元コードから）。定員を超えた場合は抽選とする。問い合わせは同大の梶間奈保准教授、メールn-kajima@u-shimane.ac.jp

「こどものだいがく」のチラシ

予約制のプログラムへの参加申し込みはこちらから

令和６年８月17日（土）付

水内先生のみんなが主役！
絵本の世界

車いすの生活知るきっかけ

子どもたちに身近な絵本には、分け隔てのない「インクルーシブ社会」を考えるきっかけになる作品があります。その中から、インクルーシブ社会に詳しい、島根県立大の水内豊和准教授（臨床発達心理学）がお薦めの作品や読書のポイントを紹介します。

◇

ろってちゃん（福音館書店）

あーはは、双子のお友だちのこーす、けーしぇと一緒にボール遊びをしています。そこに、車いすユーザーのお友だち、ろってちゃんが現れます。あーはは、ろってを遊びに誘いますが、こーすとけーしぇは、何だか嫌みたい。３人で楽しく遊んでいたのに、ろってが入ったらつまらなくなると思ったのです。でも、あーはの取り成しで一緒にゲームが始まります。果たしてゲームの行方は？　そして、４人の関係は？

作者は「ミッフィー」でおなじみのオランダの絵本作家ディック・ブルーナさん、訳者はまつおかきょうこさん。シンプルでかわいい絵と、声に出してリズムよく読みたくなる文章に、子どもたちは自分とちょっと違う、ろってのの活躍に引き込まれることでしょう。

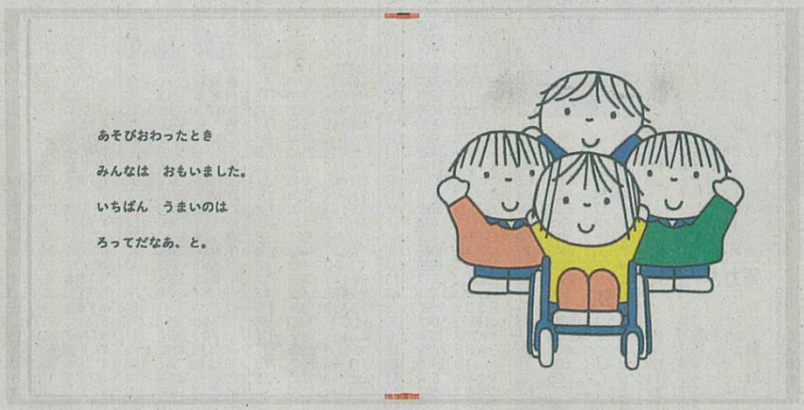
「ろってちゃん」の出版より前には、版元と訳者が異なる「ちいさなロッテ」としても出版されていました。図書館にあるのは以前のものかもしれません。蔵書検索するときには、どちらのタイトルも入れてみてくださいね。２冊は文章も、登場人物の名前も少し異なっています。ちなみにもともとのオランダ語版の原題は『lotje』なので、「ろってちゃん」が原版に近いニュアンスですね。

私の研究では、３歳ぐらいの子どもは車いすユーザーと直接関わったことはなくても、スーパーなどの駐車場にある車いすのマークは知っていました。この絵本を読み聞かせる時は、肢体不自由のある人にとってのお助けグッズである車いすのことや、歩けないから何もできないという見方ではなく、お助けグッズを使えばできることがたくさんあることに気づかせるチャンスです。ぜひ、ろってのの活躍を振り返りつつ話題にしてみましょう。

もう少し年齢が大きいお子さんには、あーはの行動や思いにも注目させて、分け隔てのない「インクルーシブ社会」をつくる一人として、自分だったらどうするか、自分ごととして考える機会にもしてみるとよいですね。

＝土曜掲載＝

「ろってちゃん」の書影（ぶん／え　ディック・ブルーナ、やく：まつおかきょうこ、福音館書店）



「ろってちゃん」の一場面（ぶん／え　ディック・ブルーナ、やく：まつおかきょうこ、福音館書店）

みずうち・とよかず　岡山市出身。３児の父。島根県立大人間文化学部臨床発達心理学研究室准教授、公認心理師。発達障害の子どもや家族の相談支援、乳幼児健診の心理相談員、ダウン症、自閉スペクトラム症などの当事者と家族団体の支援などに長く従事する。現在松江市を中心とした障害や病気のある若者当事者グループ「オロチぼたんの会」の活動を監修。著書に「身近なコトから理解する　インクルーシブ社会の障害学入門―出雲神話からＳＤＧｓまで―」。

令和６年８月24日（土）付

水内先生のみんなが主役！
絵本の世界

心のバリアーに気付く

きいちゃん（アリス館）

主人公のきいちゃんは、今でいう肢体不自由特別支援学校に、寄宿舎から通う高等部の生徒です。小さい頃に高熱が出たことで、手足にまひがあり、車いすを使って生活しています。

きいちゃんはお姉さんの結婚式に出るのを楽しみにしていましたが、お母さんはきいちゃんが周囲の視線で嫌な思いをしたらかわいそうだと、ちゅうちょします。それを知ったきいちゃんは、深く傷つきます。そんなきいちゃんがお姉さんを思ってしたことそうです。作中、式の参列者がきいちゃんを見てひそひそ話をします。障害のある人の家族の結婚にまつわる「社会の側にある心のバリアー」が読み取れます。出版は1999年。基になった出来事はそれより前でしょうから、こうした心ないことは20年以上前の話だと思いますよね。

内閣府は1958年からおおむね5年ごとに「人権擁護に関する世論調査」を実施しています。直近は2022年です。

その調査に、障害者に関する人権問題だと思ったことを複数選択で答える項目がありました。回答は「職場、学校などで嫌がらせやいじめを受けること」が43・3％、「じろじろ見られたり、避けられたりすること」が40・7％。物語と重なる「交際や結婚を反対されること」は19・0％で、17年の前回調査では「結婚問題で周囲の反対を受けること」と、質問が少し違うものの26・7％でした。

単純比較はできませんが、心のバリアーの除去が少しは進んでいると捉えていいのでしょうか？　この結果を見た当事者と家族が傷つくことのないよう、0％になることを願います。

絵本には「きいちゃんはきいちゃんとして生まれ、きいちゃんとして生きてきました。そしてこれからもきいちゃんとして生きていくのです。もし、名前をかくしたり、かくれたりしなければならなかったら、きいちゃんの生活はどんなにさびしいものになったでしょうか」とあります。障害のある人の生活のしやすさは、障害当事者ではなく、間違いなく社会の側の「心のバリアー」の在り方に、大きく依存するのです。

（島根県立大人間文化学部・水内豊和准教授）

＝土曜掲載＝

「きいちゃん」の書影（作：山元加津子、絵：多田順、アリス館）

「きいちゃん」の一場面（作：山元加津子、絵：多田順、アリス館）

令和６年８月31日（土）付

水内先生のみんなが主役！
絵本の世界

「ほめるで終わる」関わり

だめよ、デイビッド！（評論社）

「デイビッドのママはいつもいう…だめよ、デイビッド！って」。主人公のデイビッドは、実にいろいろとやらかします。泥だらけの体で家に入ったり、裸で外に飛び出したり。とうとう最後はおうちの中で野球をして、花瓶を割ってしまいます。

そこでようやく、涙を流して反省。ママは「ほうらわかったでしょ、デイビッド！」「こっちにおいで」とやさしく呼び寄せます。ママに「よしよし、デイビッド…だいすきよ！」と抱きしめられているデイビッドは、何とも安心した愛らしい表情を見せます。

読みながら、親である自分も、わが子に対してすぐ「だめよ！」って言っていたなあと反省し、背中がむずがゆくなります。

「だめよ、デイビッド！」（さく：デイビッド・シャノン、やく：小川仁央、評論社）

ふざけないの！

次作の「デイビッドがっこうへいく」では学校でも先生に「いけません！」と叱られっぱなし。3作目の「デイビッドがやっちゃった」では、いたずらをするデイビッドがひたすら言い訳をしますが、最後は「ごめんなさい」を言えて、ママに頭をなでられ「ママ、だいすき」と言いつつ眠りにつきます。

デイビッドの行動は衝動的だったり、多動だったりします。2作目の表紙にデイビッドが書いた英文があり、単語のつづりは間違いがあります。本文の文字も乱暴なタッチの手書きで、まるでデイビッド本人が書いたかのようです。

このような子どもは家庭や学校で失敗経験を積み重ね、叱られることも多く、自己肯定感を下げてしまいがちです。3作目にある作者の前書きには「言い訳しているデイビッドが本当に言いたいのは、『ぼく、しっぱいしたくないんだ』ということ」とあり、ドキッとします。主人公と作者の名前が同じですから、作者の本音が垣間見えた気がします。

「だめよ、デイビッド！」（さく：デイビッド・シャノン、やく：小川仁央、評論社）

いずれの作品もデイビッドは母親や先生にほめられたり、認められたりするハッピーエンドで、ホッとします。読者の皆さんはお子さんの良くない「行為」を叱ることはあっても、それ以上にいいところを認め、「ほめるで終わる」関わりを意識してみてください。

そしてしっかりお子さんの名前を呼んで、行為を具体的にほめて「ママ／パパもうれしかったよ」と伝えてあげるといいでしょう。

（島根県立大人間文化学部・水内豊和准教授）

＝土曜掲載＝